

---

これから

曇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これから

### 【Nコード】

N 6 1 9 6 M

### 【作者名】

曇

### 【あらすじ】

これは、わたしがどのような人間なのかを再確認するためだけに書いているものです。

いかに自分を客観的に見れるかをさぐるために、このような形で書かせていただきました。

要するに、くだらない人間失格の独白です。

## まずはじめに（前書き）

こんなもの読まなくて結構です。  
投稿してすみません。

## まずはじめに

読んで頂きありがとうございます。  
そしてすみません。

これは自分勝手に御託をならべた  
小説とは程遠いものです。

読んでも読まなくてもたいして変わりはありません。

ここに書くのは、わたしの今あるすべてです。

まず、わたしの生い立ちから説明したいと思います。

小さい頃からわたしは親の言うことが聞けない「わるいこ」でした。  
そして上にはよく出来たお姉ちゃんが一人。当たり前親の愛情と  
いうものはお姉ちゃんに

流れてゆきます。

何故お姉ちゃんのように育ててくれなかったのかなんては思いませんよ。

だって、普通に考えて出来のよいものと悪いものがあるならば当然  
よいものを選びます。

ペットだって、病気持ちよりも健康な仔がいいにきまっていますから。  
そんな失敗作のわたしは、とにかく疎まれ屋でした。

「お前は、わるいこ」言われれば言われるほどわるいこになります。  
とりあえず、何が言いたいかというと、居場所がありませんでした。

こんな事を書いて、別に同情が欲しいわけではありません。同情では心は動かないと言うことはよく学んでいるつもりです。

ではこんな恥ずかしい過去の話をして何になるかというと、このように育つと

こういう人間になりますよーという説明です。

ああ、でもこの説明では抽象的すぎて、どんな人間に育ってしまうのかは分からないですね。

一言で言うと、わたしは『存在自体が必要とされない』存在<sup>にんげん</sup>になりました。

## 幼少時

人間という生物は、何のために生きているのでしょうか。

子孫繁栄のため？

いえいえ答えはそんな簡単ではない筈です。

そもそも自我を持つことを許された生物は、所詮その自我の中でしか考えられないだろうから、何のためなどという漠然な疑問には一人の自我によって

違うだろうと思います。

要するに、自分が何のために生きてるかなんて自分ひとりが決めるものであって

他人が干渉できないものなんです。

そして、わたしが生きている理由とは、一体なんなのでしょう？  
(こんな事書いても誰に問いかけてるんだとっつ込まないでくださいね。もちろん自問自答です。)

もう自分の中では答がでているはずです。

簡単な問題であって、つまりわたしは幸せになりたいのです。

幸福は良いものです。幸せのために生きるとは、きっと幸せなのでしょう。

では幸せになるには？

・・・わたしにとっての幸せは、存在意義を認めてもらう事でした。多分普通の人間は、無償の愛でその存在自体を認めてもらっているのでしょう。

しかしわたしは居る事自体ではなく、何の役に立つのかという目線で常に見られてきました。

そしてわたしに在る意味などありません。むしろ迷惑だったりします。

世界中から『お前は何故ここにいる？』

と、問われているような錯覚に陥ったりしながら生きてきました。そんな中で次第に自分は自分を否定するようになりました。

親に反抗し、いくら憎んでいても、本当はもう心の中では自分が一番悪いと分かっていました。

小学校2年生の時の出来事です。

夕飯を食べながらいつもの様に怒られ、殴られ、親がどうしても許せなくて

一緒に住んでいるおばあちゃんの所に、ほとぼりが冷めるまで居座っておりました。

おばあちゃんの部屋で寝ながら、今思うと怖い夢を見ました。

夢の中でお母さんの泣き声がします。はっとなってあたりを見回すとそこは

広い研究所のような場所でした。

真ん中には生首が一つ置いてあり、よくみるとそれはお母さんでした。

首のまわりは機械的なチューブやらなにやらでかこまれており、まだ生きている様でした。

どうやらお母さんは、自分の代わりに国に体を提供したらしいのです。

それを知った瞬間、今までの憎しみが何なのかに気づきました。責任転換です。

怒られる責任は全部自分にあるのに、役立たずなのも自分のせいなのに、

殴られるのもあたりまえのことなのに。

わたしは、それらを全部親のせいになっているだけでした。

その事実が一番怖いものでした。激しく自己嫌悪し、そしてその怒りをまた親にぶつけてしまう。

悪循環でした。

思えば、この事実気づかないまま大人になったとしたら、そこま  
で自分は

不幸に感じることはなかったのかもしれない。

もしそうなら全部他人のせいなのですから。自分が気負う必要もな  
くなりますし。

気づいた頃にはもう遅い。



## 小学校生活

学校というところは、常に大勢の人間との関わりあいがあり  
そのため差別やいじめが絶えない空間です。

そんな、いつ自分が墮ちるのかも分からない戦場で、よく世間の人々は戦ってられるな―

なんて思っていたりしましたが、結局出した結論は、皆様は高度に  
良く出来た人間であり、

逆に自分はそこまで器用になれない愚人という、またも悲しい事実  
でした。

そもそもいじめが起こる原因とはなんでしょう？

その疑問の答は実に簡単なものでした。

要は権力の競い合いです。

動物は本能的にも競争欲というものがあり、相手よりも勝ろうとします。

じゃないと生き残れませんから。そしてそれは人間にもあてはまる  
でしょう。

自分よりも弱い者を蹴落としているのですよ。

そして、蹴落とした方は弱者よりも強い、弱者に勝った、という  
錯覚に陥るのです。

それをみたほかの偽強者の「仲間」は、“こいつに逆らうと危ない”  
と感じるわけです。

まあ、簡単に言えば猿山のボス猿集団と同じ原理ですね。

（こんな比喻を使って、わたしは馬鹿にしているわけじゃありません  
よ。嘲ってはいますが。）

集団とは数がものをいう世界ですから、すぐに悪循環になりますな。  
でも、上で書いたとおりいじめのボスは偽強者であって本物の強者  
にはなれません。

何故なら数がものをいう世界では、一人たりとも敵を作ってはいけないのです。

一人でもほころびがあればそこから布は崩れていきます。

ほかにも、次々ターゲットを変えたりしていたならば危ういです。弱者連合ができますから。

こんな油断ならない状態がいやで、わたしは戦争を放棄しました。薄っぺらい友情なんて要らないという考えです。

あえて集団から離れていき、一人の世界の住人になったのです。

元々性格の良くないわたしは、すぐにいじめられ？はじめました。（正確にいうと、いじめられてはいませんね。自分でいじめられているという実感がなかったです。先生にいわれて気づきました。）

・・・そういえばこの話を親友にしたときに、

「それって、いじめじゃなくて疎外でしょ？」なんて言われたりして、たしかに、とか思ったりしました。

とにかくいじめ改め疎外されていたわたしが興味を持ったことは、人間観察でした。

最低な人間は、立派な人間に憧れを抱き、どうしたら近づくことが出来るのか考えはじめるのでした。

## 小学生生活 2

最低な人間というものは、最低な考えしか出来ないのでしょうか？  
わたしに限ってはYesだったりします。

疎外されたわたしが、皆に対して抱いていた感情は「軽蔑」でした。  
それは自分が皆よりも劣っていたから、という考えではなく、  
本心での軽蔑でした。

わたしは皆が知らないようなことを知っている。  
いつか皆は、己の愚かさに気付くだろう。

そして、気付いたときにはもう底なし沼のなかだろう、  
なんて考えていて、自分は皆より賢い人間だとまで考えていた頃で  
した。

なんて馬鹿だったのでしょうか。  
でも、そうしていることはわたしにとって、とっても楽なものでし  
た。

何故って、存在意義があったからですよ。  
心のどこかで、底なし沼にはまってしまった友達が、わたしに助け  
を求めると。

そう思っていたんですかね。

誇張はすぐに崩れ去りました。

だれも、そんなこと意識してすらいなかったのです。  
恐ろしい沼があることに気付かなくても、世界は平和に回るのでし  
た。

わたしは、自分の世界で勝手に驕って、勝手に潰れただけでした。  
そうして、そんなことには気にも留めずに遊びまわっている友達を  
みて

また、自分が必要とされていないという事に気付くのです。

世界は知らない方が、幸せなのです。

世界は無知にやさしいのです。

わたしはこの時、自分の望みが叶わないことを知りました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6196m/>

---

これから

2010年10月13日07時00分発行